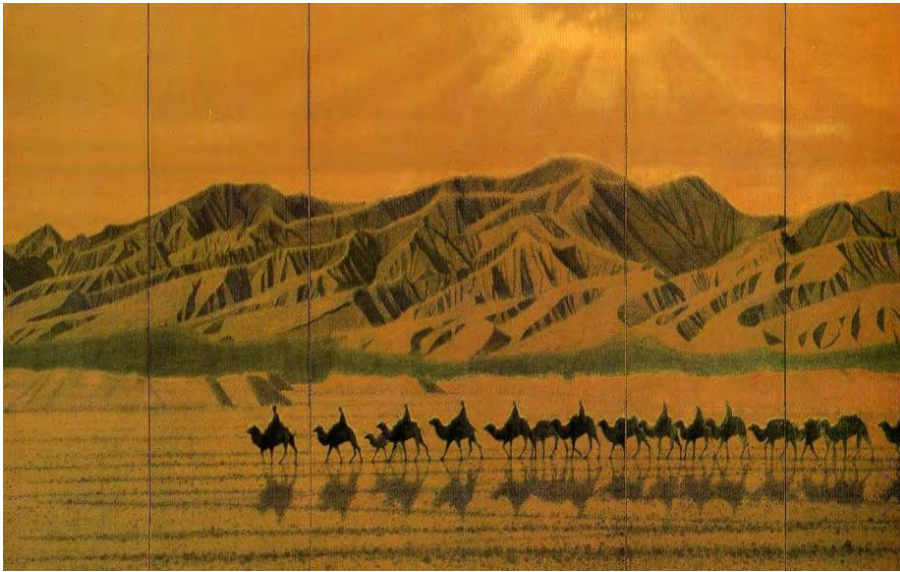


シルクロード回想

“シルクロード”の魅力を
噛みしめる。



- 1、はじめに
- 2、自己紹介
- 3、シルクロードで活躍した人々

* 玄奘三蔵 * 井上 靖

* 司馬遼太郎 * 平山郁夫 他

- 4、シルクロードの旅

北京 — ウルムチ — トルフアン

— 敦煌 — 西安 — 奈良

- 5、シルクロードの変貌（cf. 一带一路）

- 6、日中関係について思う事

2019、2、20 渡邊晴雄.

1、はじめに ----- シルクロードの魅力

『シルクロード』は、ドイツの地理学者 リヒト・ホフエン が初めて使った言葉である。彼は中国の西安から中央アジアを横切り、イスタンブールに至る絹の通商の道を想定していたと思われる。

しかし交易に限らず、東西文化の懸け橋として、宗教、芸術等を運び、各地の文化を発展させた。これは凄い事だった。

正倉院の宝物に螺鈿紫檀五弦琵琶がある。五弦琵琶は元来インドの楽器であり、中国に伝わったその楽器が、唐の工房で造られて、伝わったのであろう。ロマンを感じる。私がシルクロードに魅力を感じるのは、“未知への憧れ”からだと思う。



1、自己紹介

◎ 経歴(中国関連)

1988 北京四通公司 とのプリンタ商談仮契約
の為に初めて北京へ行った。

しかし、天安門事件で社長が追放され
ビジネスは中止されたが25日に年後に再開。
(この事件を通じて中国人の理解ができた)

1999 日中青年研修協会理事に就任
この時の研修協会会長は羽田元総理
2000 小渕基金による“中国植林活動開始”
全青連と協同で宜賓、共青城、岳陽、
雅安、阜新等での、植林を行った。

◎ 協会の活動とは別に、中国を多く旅した。
シルクロード、シャングリラ、チベット、九寨溝、
黄山、等々。

◎ 現在 TAC美術史学習会 代表



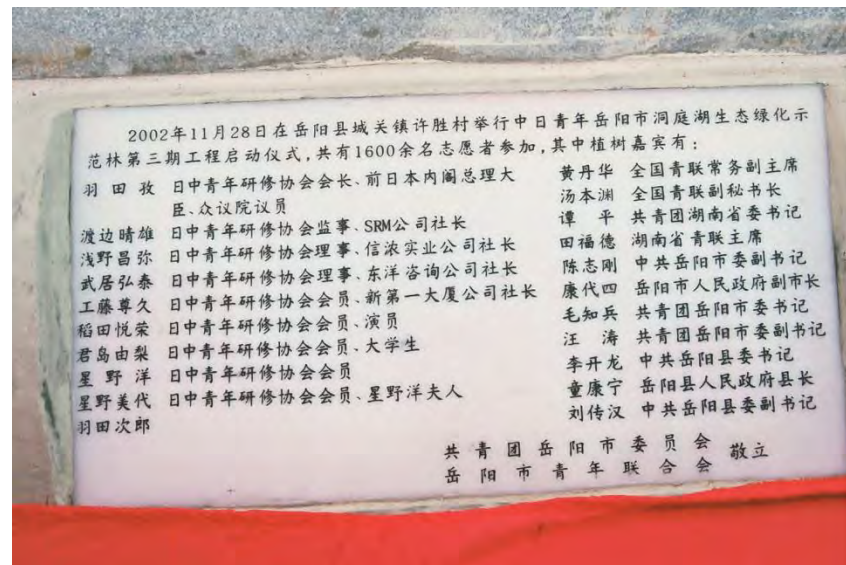
* 宜賓市第一次植樹祭



*** 岳陽中日青年友誼林、
長江クルーズに参加した友人が撮影**



*** 岳陽植林記念碑**



2、シルクロードで活躍した人々

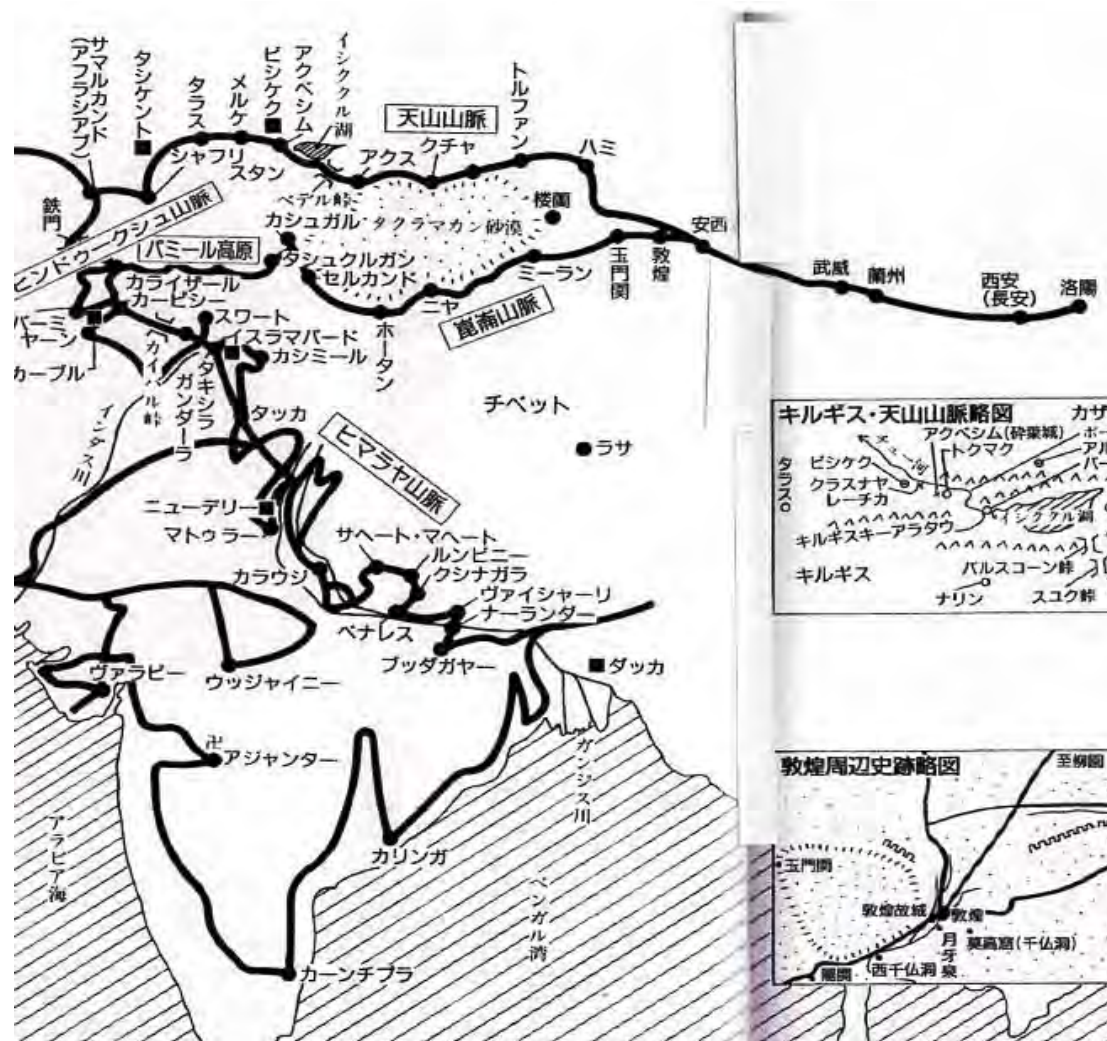
(1) 玄奘三蔵 (602～664)



- 玄奘三蔵は中国仏教界が生んだ名僧である。
- 27才の時、大法を極めるために密出国でインドへ向い長安を出発。何度も、一歩間違うと死に至る事を経験した厳しい旅だった。
- 三蔵は膨大な経典(657部)と仏像を携えて帰国した。最も重要な経典は、大般若心経と言われている。
- 皇帝高宗は国禁を犯して出国した事を咎めず、玄奘の為に訳経場を建て、蔵経楼として大雁塔を建設した。
- 皇帝が最も欲しかった物は、三蔵が見聞きしてきた中央アジアやインドの情報だったであろう。それは『大唐西域記』として、纏められた。



* 玄奘三蔵の歩いた道



(2)、井上 靖(1907～1991)



- 学生の頃、“氷壁”や“しろばんば”に親しんだ。就職後には全集を買うほどのファンだった。
- “天平の薨”や“敦煌”等の歴史小説も愛読した。“敦煌”は中国の全面的な協力の下で、映画化された。
(映画の最後に敦煌文書等を莫高窟の壁の奥に隠すシーンがある。敦煌文書はその後約900年間、眠り続けた。)
- 井上さんは、日中文化交流協会の会長を務められて、日中友好に努力された。中国を愛された方である。



(3) 司馬遼太郎 (1923～1996)



- 司馬さんの中国に関する著述はかなり多い。
- 愛読している『街道をゆく』では、“江南の道”、“中国閩のみち”、“蜀と雲南の道”があるが、四川省に関する著作は良く読んだ。
- 『シルクロード』に関する著述はそれほど多くは無かったが、井上靖さんと共著の『西域をゆく』は何度も読んだ。名著である。
お二人は、『西域へは又行きたい』と言っていた。
- 司馬さんの中国旅行はかなりあった。
 - * 1981、1984年 街道をゆく の取材旅行
上海、蘇州、杭州、紹興、寧波、成都、昆明、
 - * 1975年 新疆ウイグル自治区の旅
井上靖さんを代表とする作家代表団、水上勉他
 - * 1977年 西域の旅
井上靖、東山魁夷、中島健蔵、藤堂明保と同行



(4)、平山 郁夫 (1930～2009)



- 平山さんは広島で原爆の被害に会った。
- 後遺症の白血病で、死の恐怖に悩まされながら苦闘の末に見出したのが、仏画の世界である。三蔵がインドで修行し経文を持って帰って来る情景を描いた『仏教伝来』が入選して、生涯の目標が定まったとの事である。
- シルクロードへは100回以上スケッチ旅行をした。
- 我々が敦煌の莫高窟を訪ねた時、現地の職員は平山さんが敦煌の素晴らしさを世界に発信している事への感謝を語っていた。



大唐西域壁画

一昨年 薬師寺を訪ねた。運良く玄奘三蔵院が開帳されていて、平山さんが30年かけて描いた『大唐西域壁画』を観ることが出来た。圧倒された。平山さんは、この作品を描いた対価は、何も受け取らなかったそうである。

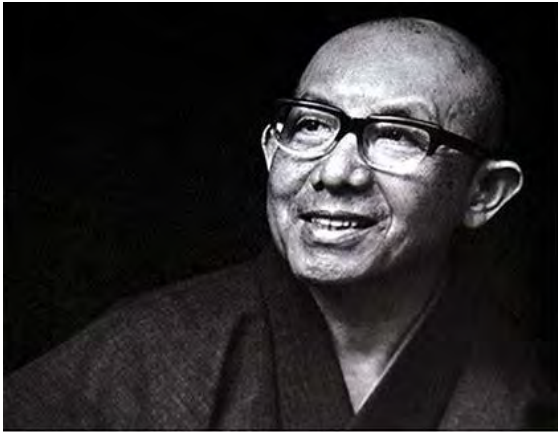
大唐西域壁画



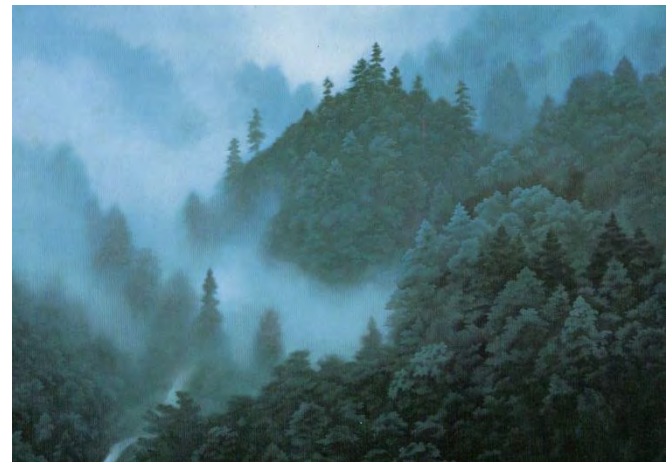
玄奘三蔵院 伽藍



(5), 東山 魁夷(1908～1999)



- 東山さんが唐招提寺の障壁画揮毫の依頼を受けたのは1970年。
10年かけて完成させたが、先ず鑑真和上の研究を始めた。
- 第一期制作の『山雲』、『風濤』では黒部、日光等のスケッチを行った。
- 第二期制作では、中国風景を描くために3回に亘る中国旅行で構想を練った。



(6)、オーレル・スタイン (1862 ~1943)



- ハンガリー生まれでイギリス国籍の探検家
- 1907年3月に、敦煌で膨大な量の古文書が、偶然発見されたという噂をイスラムの商人から聴いた。
- 1900年莫高窟の16窟住職の王円録が崩れ落ちた壁の中の4畳半位の空間の中から大量の経典、写本等を発見した。(敦煌文書)
- 王円録は字が読めなくて地方官に報告したら、適当に処理するようにとの指示。
- 1907年5月に莫高窟を訪ねて、住持の王円録を言いくるめ、数千点の文献等をわずか馬蹄銀4枚(約500ルピー)で買い取り、大英博物館へ送った。
500両(90ポンドという説もあり)
- 彼はその功でSir の称号を得た。

(7)、ポール・ペリオ (1878 ~ 1945)



- フランスのポール・ペリオはスタインの成功を聞きつけて、1908年に敦煌へ来た。
- ペリオは中国語に精通していた。
王元録と交渉して石室内に入って調査する許可を得て数千点の古文献(敦煌文書)を500両(90ポンド)で買取り、フランスへ送った。これが『敦煌学』が 起るきっかけとなった。
- 学術的には、ペリオが持ち帰った文献がスタインの物より高く評価されている。



(8), 大谷光瑞 (1876~1948)



- 近代的な学術探検を三次にわたり行った大谷探検隊はヨーロッパの中央アジア探検隊の影響を受けて大谷光瑞が計画。
- 西本願寺第22世宗主になった大谷は“仏教に関する学術調査は自分がやらなければならない”と思ったのだろう。
 - 第一次探検、1902年大谷光瑞以下5名
 - 第二次探検 橘、野村、吉川の3名
楼蘭で有名な【李白文書】を発見
 - 第三次探検 大谷、橘、ホップス
有翼天使像壁画を収集
- 大谷光瑞は1914年西本願寺宗主を辞任
- 探検隊は中断、収集品は売却され分散。

(9)、ウォーナー (1881～1955)

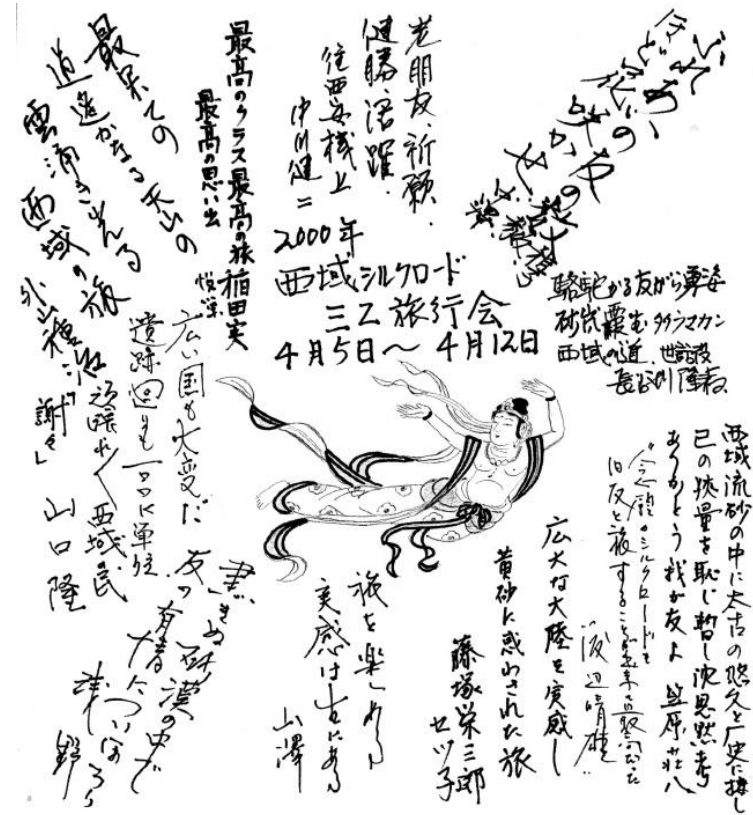
- ・アメリカ人で、太平洋争の時に京都、奈良の文化財を爆撃しないように進言した。
- ・しかし中国では、悪辣な文化の破壊、略奪者として批判されている。
- ・1924年に莫高窟の壁画を剥ぎ取って、持ち帰った。(320窟)



- ・ウォーナーが剥ぎ取った壁画は26面。
- ・ウォーナーの言い分は、
1920年頃、ロシア革命から逃れたコサック兵900名が莫高窟に強制収容された。彼等は欲求不満から38の石窟で塑像の金箔を剥しとり、暖をとるために火を使い壁面を燻し、傷つけた。
その様子を見て、今後の破壊行為から護る為に、壁面を剥がして持ち帰った。
- ・ロシアのオルデンプルグも壁画を剥がして持ち帰った。

3、シルクロードへの旅

- ・子供の頃から憧れていたシルクロードを、三条高校の同級生と一緒に旅が出来た。
玄奘三蔵が滞在した高昌古城に立った時、幸福感で一杯だった。



(1) 北京

- 故宮を足早に見学。 その壮麗さに驚く。
- 京劇を鑑賞出来た。 出し物は、孫悟空だったようだ。
- ウルムチ行の飛行機が 激しい黄砂の為に飛べず、空港で5時間足止めさせられた。



(2)、ウルムチ



- 新疆ウイグル自治区博物館
楼蘭遺跡で発見された3800年前
のミイラ『楼蘭の美女』に面会



- ウルムチ市場
ウイグル人が主体で、市場は活気
に満ちていた。
大きな羊肉の塊が路上で吊るされ
売られていた。

(3) トルフアン

* オアシスの緑と火焰山

- ・ 砂しか目に入らない砂漠をバスで長時間走った。
遥か向こう日中青年オアシスの緑が見えてきた時は感激。
- ・ ポプラ並木を通り過ぎると、そこに火焰山があった。
孫悟空が芭蕉扇を手に入れて、火焰を消した話を思い出した。



* 交河古城と高河古城

交河古城へは驢馬車に乗っていく。

小物売りの少女が自転車でついて来た。

我々グループでは、沢山買ってやった。



* 風化した土の遺跡

- 死者の骨が散らばっている処もある。
- 夜は真暗闇となって、何も見えない。
- 魔物が住んでいる気配を感じるそうで、井上さんと司馬さんは
“土の遺跡の夜は恐ろしくて、居たたまれない” と対談で話していた。



* トルファンの街風景

- ・ イスラム寺院
- ・ 驢馬車
ゆっくりだが、軽快な足取り。



トルファン賓館 での踊り子

- ・ 季節外れで、ぶどう棚の下で踊る舞は、観られなかった。 ホテルの美人の女性に頼んだら、伴奏と歌が舞の条件だと。要求された。
“佐渡おけさ”を皆で歌ったが、リズムが合わず、呆れ返られて中止。
- ・ チップを払ったら喜んでいた。
踊り子は東山魁夷の絵の様に舞った。



*** トルフアンの街風景**
火焰山の驛丁は客待ち。



爺さんがパンを作っていた。
味わうチャンスは無かった。



(4)、敦煌

- トルフアンからタクラマカン砂漠を寝台車で11時間走る。目に映る物は砂漠だけ。
- 歩いて涉った玄奘三蔵の苦勞が偲ばれる。
- 朝4時に柳園に到着。満天の星の下、バスは130km敦煌に向かって走る。
- 敦煌の手前に唐招提寺と同形の“し尾”を持った建物があつた。
- 莫高窟は鳴沙山の麓に位置していた。



* 鳴砂山 と 月牙泉

- トルフアンから寝台車で11時間、タクラマカン砂漠を走る。
- 朝4時、柳園に到着。 明るい星空の下、バスは敦煌へ130km走る。
- 最初に向かった先は、“月の砂漠”を彷彿させる鳴砂山。
- ラクダに乗って月牙泉を巡り、砂漠を渡る。
三日月形の月牙泉は風向と砂の粒度の関係で、消えることは無い。
- 以前、月牙泉の周りに寺院の建物が30位あったが、文化大革命の時紅衛兵により一ヶ所だけを残して、破壊されてしまった。



*** 莫高窟**
砂漠の中の美術館
石窟の数は492窟
石窟の主尊は275窟の交脚弥勒菩薩



* 莫高窟の 彫像と壁画

45窟 脇侍菩薩（彫像）

優しい表情で、釈迦に献身をささげた。



57窟 脇侍菩薩（樹下説法図）

説法を静かに聞く姿から、知性、品格、優しさが感じられる。



* 220窟 阿弥陀経变(部分)



- 双樹を背にして蓮台上に阿弥陀仏が座し、聖衆を多く従えて説法している。
- 新宿の瑠璃光院の白蓮華堂に大画面のコピーがある。

(5)、西安

・大雁塔

玄奘三蔵がインドから持ち帰った経文を収納する為に造られた
7層で64.5mの高さ。頂上まで階段を上り西安市内を眺めた。

・兵馬俑坑

秦の始皇帝が作ったのは、1000年も前の事。
1974年、住民が井戸を掘っていた時、偶然発見。
8,000体の俑が皇帝を永遠に守っている。



•華清池

玄宗皇帝と楊貴妃の恋物語を偲ぶ。

高校で学んだ“長恨歌”が思い出された。

運良く優雅な舞を見る事が出来た。



(6), 奈良

シルクロードの終点が奈良である事に異論はないだろう。

* 唐招提寺

伝戒の師として招かれた中国の名僧鑑真が開基した。

12年間に5回失敗を重ね、失明して日本にたどり着いた。

佇まいは、素晴らしい。



* 薬師寺

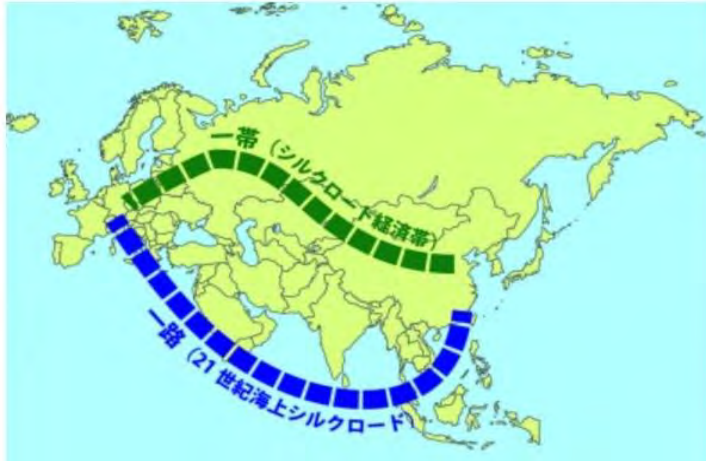
奈良へ仕事で来る機会が多かったので、薬師寺を訪ねた回数も多い。
特に フェノロサ が“凍れる音楽”と表現した 東塔 がお気に入りです。素晴らしい。
大池の先から、東塔の撮影を数回試みたが、悉く失敗に終わった。



薬師寺から唐招提寺へ通ずる道は、何度も歩いた懐かしい道である。
一昨年、家族と一緒に歩いた。
適当に風化した塀の壁と熟した枇杷の実が奇麗にマッチしていた。



5、シルクロードの変貌（ cf. 一帯一路）



- シルクロードは内陸部にあり、船による大量輸送が可能な海側の地域より、発展が遅れた。
（鉄道、道路のインフラ投資は進んでは来たが、）
- 2014年に習金平が提唱した『一帯一路』は、問題を多く抱えながらも、前進している。インド北部、ロシア南部、アフガニスタン、モンゴル等シルクロード地帯の期待は大きいようだ。
- 中国からの融資を返済出来なくなる国もあるようだ。
- 中国は周辺国への援助だけでなく、他国へ開発資金を融資する事で地位向上を期待。インド洋、東シナ海の沿岸諸国の協力の下海運航路を拡充している。
- 日本も、得意な分野（鉄道、道路建設等）では参加していかないと、アジアでの存在感が薄れて行くような危惧を感じる。

◎鉄のラクダ中欧班列の動向

【軌道幅の違いから、積み替えが必要】
(中国と欧州を結ぶ国際定期貨物鉄道網)



- 料金は船便の2倍だが、日数は1/3程度
- 西安を物流拠点として成長
- カザフスタン、ロシア、ベラルーシ、ポーランドを経て、ドイツ等欧州へ40両以上を連ねて1万キロを2～3週間で駆け抜ける。
- 中国企業の傘下となったボルボの大慶工場、フォルクスワーゲンの長春工場は製品・部品の輸送を鉄道に切り替えた。

・『16+1』は中東欧16ヶ国は協力を話し合う枠組み。
2014にハンガリーとセルビアを結ぶ350キロの高速鉄道を中国が支援する事が決まった。

・しかし中東欧は必ずしも中国歓迎一色ではない。軋轢も目立ってきているようだ。



6、日中関係について思う事

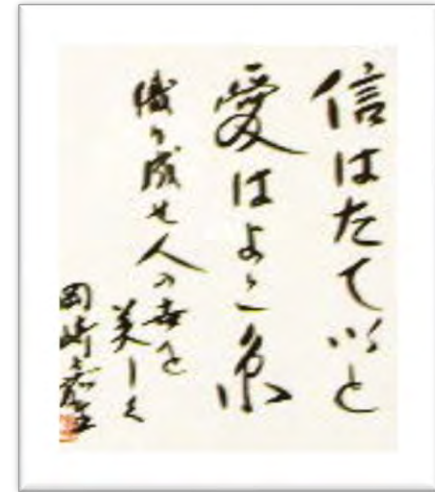
(1)、日中青年研修協会について

＊中国政府から依頼された青年600名に対して、本来の企業研修を施し、人材の育成に貢献した。

＊岡崎嘉平太(研修協会初代会長)の功績

- ・国交断絶状態だった日中関係を憂い、貿易の場を利用した交流を進め国交樹立へ繋げた影の功労者
- ・周恩来と18回に及ぶ会談を通じてアジアの安定と共存を語り合い信頼と友情を深めて行った。
- ・共産主義、中国にアレルギーがあった日本で反体制財界人という批判を浴びながら、

“相手を知ること、相手の立場に立つこと”
を信条に、日中のパイプ作りに奔走した。



出典：岡崎嘉平太記念館資料より

(2)、羽田さんと一緒に会った中国要人



胡錦濤 さん

李鵬 さん



唐家璇さん

中国と日本は近すぎるので、問題が起きやすい。その時に非公式ルートで問題が大きくならないよう、活動出来る人が不可欠である。
日本では、そんな人が今は見つからない。

胡锦涛副主席との記念撮影

日中環境保護記念協力フォーラム(2002,4,12 於北京人民大会堂)



(3)、 釣魚台での晩餐会 2002,4,12



6、中国との関係について思う事

- 日本と中国は一衣帯水の関係にあるのに、日中平和条約締結時の考え方から大きく外れ、日本は外交不在のような様相をていしている。
- イーゼス・アショアとか、準空母の構想とか、戦争の危険性が増してきたように感じる。安全保障で軍備拡張を競うやり方では、平和を維持できない。
- 戦争を経験していない人々が危険思想に走り、国を亡ぼす事がないよう願っている。
- 私は30年以上、中国人と付き合いってきたが、嫌な感じを持ったことは無かった。それは中国と文化交流をして来た小沢征爾さん、谷村新司さんも同じ思いの筈。
- 日中友好の考え方は重要で、民間ベースの”草の根運動“が益々重要になってきたと思う。